

日本婦道記

松の花

山本周五郎

青空文庫

北向きの小窓のしたに机をすえて「松の花」という稿こう本ほんに朱を入れていた佐野藤右衛門とうえもんは、つかれをおぼえたときみえてふと朱筆をおき、めがねをはずして、両方の指でしずかに眼をさすりながら、庭のほうを見やった。窓のそこにはたくましい孟宗竹もうそうちくが十四五本、二三、四五とほどよくあい離れて、こまかな葉のみつしりとかさなつた枝を、澄んだ朝の空気のなかにおもたげに垂れている。藤右衛門はつやつやとした竹の肌に眼をやりながら、肩から背すじへかけて綱をとおしたようなつかれの凝こりをかんじた。

藤右衛門は紀州徳川家の年寄役で、千石の食しよく禄ろくをとり、御勝手がかりという煩務をつとめとおして来た。六十四歳のきようまで、ほとんど病気というものを知らず、いくらか髪に白いものをまじえたのと、視力がややおとろえたのを除けば壯者をしのぐ健康をもつていた。けれどもその年の春さき、老年をいたわるおぼしめしから御勝手がかりの役目を解かれ、菊の間づめで藩譜はんぷ編纂へんさんのかかりを命ぜられてから、おおくは自分の屋敷の書齋にとじこもつて、したやくの者たちの書きあげてくる稿本に眼をとおすだけが仕事にな

り、煩雑な日常から解放されたのであるが、それ以来、かえって身すじにつかれの凝をか
んじるようになった。いま机の上にひろげている稿本「松の花」は、藩譜のなかに編まれ
る烈女節婦の伝記と、紀州家中、古今のほまれ高き女性たちを録したものである。藤右衛
門はつねづね、泰平の世には、婦道をたたくことが、風俗を高めるこんぼんである
と信じていた。それでその校閲にはもつとも念をいれ、一字一句のすえまで吟味を加えて
いるのだが、この四五日はなんとなくつかれ易く、ともすれば惘もうぜん然と筆をやすめている
ことが多くなつた。——身にいとまのあることがかえつて悪いのだろう、馴れてくれればこ
んなことも無くなるにちがいない。藤右衛門は自分ではそう考えていた。けれどもその原
因はじつはもつとほかにあつた。妻のやす女じよがいま重態なのである。去年の夏からのわず
らいがしだいに増ぞうあく悪するばかりで、すでに医師もみはなしていたし当人もすつかりあき
らめていた、ことにゆうべはほとんど臨終かと思われ、わかれの言葉もとりかわしたほど
である。病気が癌がんという不治のもので、はやくからたがいに覚悟ができていた。
かなしさもつらさもいまさらのものではない。ただ臨終が平安であれと祈るほかには、藤
右衛門の心はしらじらとした空虚しか残っていないかつた。

竹のつやつやと青い肌を見ていた藤右衛門は、小走りにいそいで来る廊下のあしおとを

聞いてわれにかえったように筆をとりあげた。

「申しあげます、父上、申しあげます」

長子格之助かくのすけの声であった。

「あけてよい、なにごとだ」

「病間へおはこびください、母上のごようすが悪うございます」

「……そうか」

「すぐおはこびくださいまし」

藤右衛門は立とうとして、どういうわけか一瞬ためらい、机の上にひろげてある稿本の文字に眼をやった。なんのつもりか自分でもわからなかつた。それで硯箱すずりばこのありどころを直しなどして立ちあがつた。渡廊下を母屋へわたり、鉤かぎのてにまがつて奥の間、中間、内客ないきやくの間とゆくと、そのあたりの廊下にはもう老若の家士たちがつめかけ、いずれも石のように息をころし頭を垂れて端坐していた。藤右衛門がはいつていったとき、妻はまさに息をひきとつたところであつた。長子格之助、二男金三郎、格之助の嫁なみ女、裾のほうには妻の愛していた婢頭はしたがしらそよもいた。みんなせきあげて泣いていた。

「まことにお安らかな、眠るような御往生でございました」

さいごの脈をとつていた医師がそう云うのを聞きながら、藤右衛門はしずかに枕まくらもと許へ坐つた。

妻の唇にまつごの水をとつてやつた。もはやなにを思うこともなかった。妻の死顔はこのうえもなく安らかで、苦痛のいろなどはいささかもなかった。藤右衛門はしばらくのあいだ、祝福したいような気持で妻の面を見まもつていたが、ふと夜具のそとに手がすこしこぼれ出ているのをみつけ、それをいれてやろうとしてそつと握つた。するとまだぬくみがあるとさえ思えるその手がひどく荒れてざらざらしているのに気づいた。妻の手を握るなどということはかつて無いことだった。だからいまはじめて触るように思い、その皮膚がそのように荒れているのをみつけたとき、藤右衛門はそれまでまるで知らなかった妻の一面に触れたような気がした。

「通夜は半通夜にする、通知にはそれを忘れぬよう、それぞれでおちなくはからえ」
やがて彼はそう云つて立つた。

はなれの書齋へかえって、机の前へ坐ると直ぐ、彼はおちついた身がまえて校閲の筆をとりあげた。頭は冴さえているし、心もしずかだった。ただひとつところ、からだのどこかに蕭しょう殺ころと風のふきぬけるような空くう隙げきがかんじられた。

弔問の客たちが来はじめたのはそれから一刻ときあまりのちのことだった。その多くは格之助が応対することで足りた、藤右衛門でなければならぬ客もくどくど悔みをのべるようなことはなかった。今日あることはみんな予期していたし、誰にもいまさらといなぐさめの言葉などはなかった。午ひるすこしまわってから本家にあたる佐野伊右衛門いへもんが来た。伊右衛門は二千六百石の老職で、藤右衛門より二歳の年かさである。書齋へはいつて来た彼は、机の上を見やりながらさすがにあきれたという顔で云った。

「このさなかに仕事か」

「なにやかや、とりこみつづきでだいぶおくられているものですか」

「いくらおくられているからと申して、今日一日をあらそうことではあるまい、それは仏にたいしても薄情というものだ」

「それでも、べつにさし当ってする仕事はなし、ぼんやりしておるのもこれでなかなかしよざいのないものです」

藤右衛門はそう云つてにが笑いをした。

「なるほど」

伊右衛門はふうと鼻をならした。

「なるほど、しよざいが無いというのが本当かも知れぬ、いまさら死別がつかなくて泣ける年でもなし、このように人手があまつていては用事もなしとすると、いかにもこれはしよざいが無いというかたちか」

「おいそぎでなかつたら一盞さんととのえましようか、わたくしはお相手がありませんけれども、そのうちにはくらんどがみえましよう」

森蔵人もりくらんど、千石のおよりあい大寄合であるが蔵人がそのまま食人くらんどに通ずるほどの酒豪だった。

伊右衛門も酒ずきではなかなかの組である、いちおう拒むようすだったが、また藤右衛門の心をおしはかったふうで、

「それでは早てまわしに、いまから通夜をはじめるとするか」

と腰をおちつけた。そのまま書齋へしたくをさせた。膳ぜんをはこぶ侍たちはみんな眼を泣き腫はらしていた、それでいくらか酒脱しやだつをじまんにする伊右衛門は、給仕に坐ろうとする若侍の一人をしいてさがらせ、自分で酌をしながら呑みはじめた。間もなく森蔵人がやつ

て来たし、そのほかにも二三人加わる者があって、暮れかかる頃までにぎやかな酒がつづいた。

半通夜ということをかたく守ったので、十時をすぎると弔問客はつきつきにかえつていった。そのさいこの客を見送つてから、藤右衛門は朝のままおとずれなかつた病間へはいった。なきがらは型どおりに置き直されてあつた。枕頭ちんとうにすえられた経きょうづくえ机しきみには櫛の枝をかざり、香のけぶりが燈明のまたたきのなかにゆれていた。伽とぎをしていたのは格之助兄弟と家扶かふの六郎兵衛ろくろべえ、用人ようになさな左内、それに若侍たち四五人だった、女たちは次の間にいた。藤右衛門は香をあげ、しばらく枕頭に坐つていたが、やがてしずかに立ちあがると、「つかれたであろう、みなよいほどにさがつてやすめ、格之助と金三郎で伽をする、遠慮なくさがるがよいぞ」

そう云つて部屋を出た。寝間へはいらすずに、暗い廊下をふんでまた書斎へかえつた。すつかり片付けられた室内に、ひっそりと燭しよくだい台の火がまたたいていた。机を光に向け直して坐つた、頭はやはり冴えているし、想念もおなじしずけきにあつた、けれども風のふきとおるような心の空隙だけは、時を経るにしたがつておおきくなるように思えた。かなしみでもない、そういう感動はながい月日のあいだすでに飽きるほどあじわいつくして

来た。いま彼の心にかようものはしらじらとした空虚の感である、からだのどこかを暗く塞いでいたものがぼかりと脱れて、そこを蕭々と風のふきとおるような感じがするだけだった。藤右衛門はつと手をのぼして稿本をひらいた。それから硯箱の蓋をとった。けれどもそれは校閲をしようと思ったからではなく、習慣でしぜんとそうしたまでのことだった。彼はそのままながいこと空をみつめていた。かなりほど経てからのことであつた、遠くから音をしのぶ人のざわめきがきこえて来たので、藤右衛門はふとわれにかえつた、耳にたつほどではないが、病間のあたりでかすかに、音をしのばせた看經かんきんの声がしはじめた。藤右衛門は鈴をとつて強くうち振つた。

三

来たのは金三郎であつた。

「お呼びでございますか」

「仏前にまだ誰ぞおるか」

「はこ」

障子のそとで、金三郎が廊下に手をつくさまが感じられた。

「誦経ずきょうの音がするではないか、誰だ」

「……はい」

「誰々がおるのだ」

「はい。家士、しもべの女房どもでございます」

金三郎の声は苦しそうだった。藤右衛門の眉がけわしく歪ゆがんだ。掟おきてのきびしい武家屋敷では、家士しもべの女房などが、みだりに奥へはいることはゆるされない。それで藤右衛門は怒りを抑えながら云った。

「誰がゆるしてさようなことをした、伽はそのほうと格之助でせよとかたく申しつけたではないか、ならんぞ」

「父上、おねがいでございます」

しずかに障子をあげ、廊下に平伏したまま金三郎は訴えるように云った。

「あの者どもは母上を、つねづね実の親のようにもおしたい申しおりました。あの者どものかなしみは、世間ふつうのしもべが主人をうしなったのとは違います、肉親の母親をなくしたよりもつらいのです。兄上にもわたくしにもそれがよくわかります。とてもゆる

さぬとは申せませぬ、父上。どうぞ今宵こよい一夜のお伽をゆるしておやり下さい、おねがい
ござります」

藤右衛門はしばらく眼をとじていたが、やがて低くつぶや呟くように云った。

「……よい、ゆけ」

金三郎は障子をしめて去った。

しもべの女房たちまでが、実の親のようにしたつていたという。それは考えるまでもな
く差別を無視した云いかたである、日頃の藤右衛門なら一言のもとに叱りつけるところだ
った、けれども金三郎の言葉のなかにはなにか心をつもものがあつた、主人を親よりもた
いせつに思うということは、当時の世風としてはきわめてあたりまえなことだ、然し金三
郎の云つた意味はそのようなものではない、もつとふかく、もつとじかに訴えてくるもの
があつた。それは亡き妻と、かれらのあいだだけにゆるされるもので、彼にはうかがい知
ることもできず、また拒む余地もないことがらのように思えた。——あれはどのようなこ
とをしてやつたのであろう。藤右衛門はまたしても、自分の知らぬ妻の一面をみつけてお
どろかさされた。

看経の声はしめやかにつづいていた。十二時このつをまわつてから、それがちよつと途絶えた

ので、香をあげようと思つて立つていったが、襖ふすまのそとまでゆくと、部屋のなかで人々のむせび泣く声がしていた。それはいままで誰が泣いたよりも悲痛な、胸を刺しとおす響きをもっていた。かれはそのままそつと廊下へ戻つた、すると、格之助が居間からあらわれた。

「あの者たちに夜食をだしてやれ」

藤右衛門はそう云つて書齋へかへつた。

葬儀はその翌日におこなわれ、なきがらは城じょうせい西せいの金竜寺きんりゅうじにほうむられた。式のしだいは質素であつたが、藩侯から特に使者がつかわされたりして、思いがけなくも名誉なものになつた。ほうむりの日の朝から、藤右衛門は書齋にこもつて「松の花」の校閲をつづけた。それまで身のまわりの世話は格之助の嫁にさせていたが、それをやめて松田吉十郎という若侍のうけもちにした、そして食事もずっと書齋へはこぼせ、藩譜編纂の用務のある者のほかにはほとんど客に会わなかつた。夜ごと、夜ごと、燭のしたで朱筆をとつている彼の耳に母屋の方で音をしのばせて看経する人声がかすかに聞えた。——またあの女房どもか、はばかりがちな低い声でそれは直ぐわかつた。またしじまのおりには、庭むここの家士長屋の方からも、むせぶような念仏の声のつたわつて来るがあつた。ど

ちらも遠くへだたつたところから途切れ途切れに聞えて来るのだが、その声には肺腑はいふをしぼって哭なくものの底知れぬなげきがこもっていた。——どうして妻はあれほどのなげきをかれらに与えるのか、かれらにとつて妻はそれほどおおきな存在だったのか。藤右衛門は校閲の筆をやすめて、いくたび不審にうたれたか知れなかった。初しよ七日なのかの法会ほうえがすんだ夜である。ひさびさに子供たちと食事をした藤右衛門は、まえから考えていたのであろう、格之助を呼んで、今宵から屋敷うちで看経はならぬと云った。

「供養はいちどに仕すませるものではない、十日二十日の看経より、ながく心にとめて忘れぬこそ、仏へのまことの回向えしやうだ」

四

「よくそう申し聞かせて」

と藤右衛門はつづけて云った。

「今宵からはかたく無用だと云え、それから、その者どもにやすのかたみわけをして遣つかわそうと思うがどうか」

「かたじけのう存じます、わたくしからおねがい申すつもりでおりました、さぞよろこぶことでもございました」

「それでは遣わすべき者を呼んでまいれ」

そう云つて藤右衛門は立つた。

婢頭のそよをつれて亡き妻の居間へはいつていったとき、呼びあげられた家士やしもべの女房たちが、次の間にひかえて平伏していた。部屋のあるじが一年あまりの病間ぐらしで、ながらく使わずにあつたためか、そこには婦人の居間らしいなんのにおいもなく、年代を経て古くつやを帯びた調度類が、塵ちりもとめぬ清浄さできちんとならんでいるだけだつた。

「どういふ品をお出し申しましょう」

「どれでもよい、わしが選ぶから順にとりだしてくれ」

「かしこまりました」

そよは先ず古いほうの箆たんす筒をあけ、抽出ひきだしの中からつきつきに衣類をとりだして藤右衛門の前へならべた。

「格之助、おまえもなみになにか選んでやれ」

藤右衛門は燭をあかるくして、そう云いながら格之助とともに衣類を選びはじめた。

それはみんな着古した木綿物だった、すっかり洗いぬいて色のさめたものや、たんねんに継つぎをあてたものばかりだった。——こんなものを大切そうに箆筒へしまつて置くなどは。そう思いながらみていくと、取り出されるものみな木綿で、どれもいくたびか水をくぐり、なんか仕立て直された品ばかりである。夏のもの冬のものみんなおなじだった。ややみられたのはふたかさねの紋服と紋服用の帯であったが、そのほかはどれひとつとして新しいものはなく、まして絹物はひと品もなかった。

「これでしまいか」

藤右衛門はなかばあきれて訊きいた。

「はい、あとはお髪道具ぐしがひとそろえあるだけでございます」

「そのほかにはもうないのか、まつたくこれでしまいなのか」

「……はい、お納戸の長持には、まだお着古しもございますけれど、もう継つぎぎはぎもならぬほどのお品で、ひとの眼に触れては恥ずかしいゆえ、よいおりをみて焼き捨てよ、との仰せでござりました」

そう云つてそよはらはらと泣いた。藤右衛門はもういちどそこにある衣類をとりひろ

げてみた。洗い清めてはあった、どんなちいさなやぶれ目にもきちんと継があててあった、けれどもかたみわけとしてひとに遣やるには、あまり粗末な品々である。藤右衛門はまだ茫然とした気持からさめることができず、ふりかえつて格之助の顔を見た。

「これでは、いかにもみぐるしすぎるように思うが、どうか」

「母上が身におつけになった品ですから、お遣わしになってよろしかろうと存じます。わたくしも一枚、なみに頂戴いたします」

格之助はそう云つて、まず自分から古びた衾あわせを一枚ぬきとつた。それで藤右衛門もはじめてそよに領うなずいてみせた。

「ではよいようにわけてやれ」

「かたじけのう頂戴つかまつりまする」

そよはすり寄つて、その衣類を敷居ぎわまではこんだ、そして次の間に平伏している女房たちにむかつた、しずかに涙を押しぬぐいながら云つた。

「旦那さまのおぼしめしで、亡き奥さまのおかたみわけをいたします。……おまえさまたちも知っているとおおり、つねづね奥さまはおそれおおいほど、つましいくらしをあそばしておいででした。これまでわたくしたちお末の者が、祝儀不祝儀につけて頂いたものは、

それぞれ新らしくお買い上げになった高価な品ばかりでした。おまえさまたちのなかにも羽二重はふたえなり、小紋なり、結構な晴れ着の一枚二枚頂戴しないかたはひとりもないと存じます。わたくしどもにはそれほどお心をかけて下さいましたのに、奥さまがお身につけておいであそばしたのは、みなこのような御質素なお品でした。このお品をよく拝んで下さい」
そよは衣類をさし示しながら云った。

「ここにあるのが、紀州さま御老職、千石のお家の奥さまがお召しになったお品です。わたくしたちには分にすぎたくださいれものをあそばしながら、御自分ではこのような品をお召しになっていたのです。……この色のさめたお召物をよく拝んで下さい、継のあたった、このお小袖をよくよく拝んで下さい」

そよの喉のどへ嗚咽おえつがせきあげた、女房たちも声をころしてむせびあげた。藤右衛門はその嗚咽に追われるもののように、卒然と立ってその部屋を出た。

居間へはいると直ぐ格之助が追って来た。

「御きげんを損じましたでしょうか」

彼は父の眼を見上げながら云った。

「そよが申しすごしましたなら、わたくし代ってお詫わびをいたします。あのような気性で

「ごぎいますから、母上のおかたみを見てとりみだしたのでごぎいます、どうかゆるしてや
つて頂きとうごぎいます」

「べつにきげんを損じはせぬ、けれども」

藤右衛門は壁をみつめながら、

「やすはどうしてあのような物を、あのようなみぐるしい物を身につけていたのだ。わし
はすこしも気がつかなかった、本当にあんなものしか持っていなかったのか」

「母上は、つましいことが好きでございました」

「それだけか、つましくすることが好きだから、それだけであのような粗末なものを身に
つけていたというのか」

格之助はふかく面を伏せていたが、やがて低い声で呟くように云った。

「……お召物だけではございません。お身まわりのことすべてをつましくしておいでし
た。かようなことを申し上げましては母上のお心にそむくかとも存じますが、母上はいつか
このように仰せられていました。……武家の奥はどのようにつましくとも恥にはならぬが、
身分相応の御奉公をするためには、つねに千石千両の貯蓄を欠かしてはならぬ」

格之助がそう云うのを聞きながら、藤右衛門はふと、息をひきとったばかりの妻の手の

触感を思いだした。夜具のそとにはみ出ていたのをいれてやろうとして、なにげなく握つた妻の手はひどく荒れてざらざらとしていた。

「それはおまえに云つたのか」

「いえ、なみをめとりましたとき、あれにそうおさとしくだすつたのです。わたくしは次の間からもれ聞いたのですが……はじめて母上の御日常がわかつたと思ひました」

藤右衛門はじつと自分の右手をみまもつていた。その右のたなごころには、まだあのときの触感がのこつていようだつた。——千石の奥の手ではなかつた。あの皮膚のかたさ、ひどく荒れた甲は、千石の家の主婦のものではない、朝な夕な、水をつかい針を持ち、くりや厨にはたらく者とおなじ手であつた。

やす女はおちこぼんがしら大御番頭九百石の家に生れ、五人きようだいのなかのただ一人の娘として家族の愛をあつめてそだてられた。顔だちもまるくおっとりとしていたし、たちいふるまひものびやかで、彼女がとついで来てからは、きゆうに家のなかが春風のふきとおるようになにおやかな気分につつまれたものである。よそよりもいちだんと家法のきびしい、きく規矩でかためたような佐野家の日常とはまるでかけはなれた、のびのびとしたふんいき雰囲気をも身にもつていた。——これで家政のたばねができるだろうか。はじめのうち藤右衛門はいつもそ

れを案じていたくらいだった。そういうかんじはいつまでも頭から去らなかつた。代々質素だいいちの家風で、家計はゆたかであつたし、召使の数もおおく、やす女はただ主婦という位置にすわっているだけでよかつた、なんの苦勞もなく心配もないはずだった。藤右衛門はそう思っていたし、事実また彼の眼にうつる妻の姿は、いつまでもとついで来たときとおなじのびやかさ、明るくおっとりして、千石の老職の妻というおちついたかんじでしかなかつたのである。あのひどく荒れた手に触れたとき、藤右衛門はまったく意外だった、皮膚の荒れたその手と、彼の印象にある妻とはどうしても似あわず、自分のまったく知らなかつた一面にはじめて触れたような氣持だった。

「これほどのことに、どうして氣がつかなかつたのであろう」

格之助が去つてからも、茫然と自分の手をみまもっていた藤右衛門は、ふとそう呟きながら面をあげた。

三十年もひとつ家の内に起き伏しして、二人の子まで生なした夫婦でありながら妻の本当のすがたというものを知らずにすごして来たことが、はじめていま彼にわかつた。千石の家の夫人として、なんの苦勞もなく、のびやかにくらししているとばかり思っていたが、それは妻のすがたのほんの一部分でしかなかつたのだ。良人おとこの眼にもつかず、まして世の人

には窺^{うかが}い知ることできぬところで、妻はそのつとめを全身ではたしていたのだ。

「そうだ、いまにして考えれば思いあたることかしばしばあった」

藤右衛門はふたたび低く呟いた。

五

まえにも云つたとおり、佐野家はもともとゆたかな家計をもっていた。けれどもきまつた食禄でまつたくの消費生活をするということは考えるほどたやすくはない。物価のうごきや家族の増減、そのほか眼にみえぬところで出費は年々とかさんでゆくのがふつうだった、しかも武家には格式というものがあつて、千石は千石だけの体面を保たなくてはならぬ。佐野家がいかにゆたかな家計をもっていたとしても、これをうけつぐ者にすこしのゆだんでもあれば、たちまち底を洗うことはわかりきつたはなしだ。藤右衛門は藩の御勝手がかかりとして、四十余年のあいだしばしばそれを痛感して来た。紀州五十余万石の経済ではそのことを痛いほどかんじながら、自分の家のことにはまったく関心をもたなかつた。ある年、家臣一統から藩へ献上金をすることがあつた、そのとき佐野家からは三百金ずつ

前後数回にわたって献上した。——うわき噂にたがわず佐野家は内福だ。家中の人々はそう云つて舌を巻いたが、藤右衛門はそれほどにも考えず、自分の家計としてはごくあたりまえだと思つただけであつた。そういう例はすくなくない、藩の御勝手つごうで食祿のわたらぬことがつづくとか、非常な物価昂騰こうとうとか、百人に近い家士たちのために、年々更新しなければならぬ武具調度の費用とか、ほとんど不時の出費のたえることはないといつてよかつた。それを佐野家ではきわめてぶじにすごして来た、藤右衛門はどんなばあいにも心を勞することなく、うちこんで御奉公をすることができたのである。そして今日まで、それをあたりまえなこととして、誰のたまものとも考えることはなかつたのだつた。

「なんとという迂濶うかつなことだ。なんとという愚かな眼だ。自分のすぐそばにいる妻がどんな人間であるかさえ己おのれは知らずにいた」

藤右衛門はおのれを責めるように呟いた。

「佐野の家があんのんにすごして来たのも、自分がぶじに御奉公できたのも、かげ蔭にやすの力があつたからではないか、こんな身近なことが自分にはわからなかつた、妻が死ぬまで、自分はまるでちがう妻をしか知らなかつたのだ」

いたましく皮膚の荒れた手ゆびと、あのように粗末な遺品をとおして、いまこそ藤右衛

門にはまことの妻がみえはじめたのである。彼の心にあつた空虚な感じはいつかぬぐい去られたように消えて、その代りに新らしい感動がおおきく脈を搏ちだした。……藤右衛門は立つて居間を出た、松田吉十郎がついて来て、書齋に灯をいれて去った。

藤右衛門は机の前にすわった。そこには彼が校閲しかけている稿本が置いてある。藤右衛門はその表紙の「松の花」という題簽をあらためて見なおした、松の緑はかわらぬ操の色だ、そこに撰まれたのはあらゆる苦難とたたかった女性たちの記録である、いまの世にひろめ、のちの世に伝えて、人の心をふるいたたしめる烈女節婦の伝記だ。

「けれども……」

藤右衛門は低く呟きだした。

「烈女節婦はこのように伝記に撰せられるものだけではない、世の苦難をたたかいぬいたこれらの婦人は頌むべきだ。しかし世間にはもつとおおくの頌むべき婦人たちがいる、その人々は誰にも知られず、それとかたちに遺ることもしないが、柱を支える土台石のように、いつも蔭にかくれて終ることのない努力に生涯をささげている。……これらの婦人たちは世にあらわれず、伝記として遺ることもないが、いつの時代にもそれを支える土台石となつているのだ。……この婦人たちを忘れては百千の烈女伝も意味がない、まことの節

婦とは、この人々をこそさすのでなくてはならぬ」

藤右衛門は呟きおわつて空へ眼をあげた。彼はいま稿本「松の花」に序すべき章句をおもいついたのである。まつりごとをあずかるものの心すべきは、みえざるところをおろそかにせぬことだ、「松の花」はあらわれた烈女たちを伝えるだけでなく、世にかくれたる節婦のおおいことをもあきらかにすべきである、「……やす」藤右衛門は夜の空に妻のおもかげを描きながら呟いた。

「おまえはわしに世にあらわれざる節婦がいかなるものかを教えてくれたぞ」
 そして稿本をひらき、しずかに朱筆をとりあげた。

彼はいまふしぎなほど新しい昂奮を感じていた。燭の光にうつしだされた横顔にも、ひさしくみえなかつた充実した色があらわれたし、ひきむすんだ唇のあたりには、まだ御勝手がかりをつとめていた頃のきびしい力感さえよみがえってきた。——妻は生きているのだ、息災でいた頃よりも、あざやかに紙一重の隙もないほどびつたりと彼の心に溶けこんでいる、春風のようにおっとりとした顔、やさしく韻いんのふかいもの云い、しずかな微笑……なにかもはつきりと彼の心のなかに生きているのだ、更ふけてゆく夜のしじまに、彼はあでやかな妻のおもかげと相對するような氣持で、しずかに朱筆をはこばせていた。

青空文庫情報

底本：「山本周五郎全集第二巻 日本婦道記・柳橋物語」新潮社

1981（昭和56）年9月15日発行

1981（昭和56）年10月25日2刷

初出：「婦人倶楽部」大日本雄辯會講談社

1942（昭和17）年6月

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井和郎

2019年1月30日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

日本婦道記

松の花

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 山本周五郎

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>